



まちづくり団体の取り組み
～こんなことやってます～

「泳げる霞ヶ浦」を目指したまちづくり - 霞ヶ浦市民協会の取り組み -

霞ヶ浦市民協会とは

- ・ 1995年、霞ヶ浦で開催された第6回世界湖沼会議を契機に設立した社団法人の市民活動組織。
- ・ 会員数、約700人で、住民を中心として、企業、研究者、行政など、幅広い層からなる。
- ・ 生活者の視点で、霞ヶ浦の浄化から流域での暮らし創造までを視野におき活動する。
- ・ 「泳げる霞ヶ浦」をめざして効果的に活動に取り組むために、泳げる霞ヶ浦2020市民計画を策定して、2001年より、5つのプロジェクトをスタートさせた。



かつての湖水浴場（麻生町天王崎）

なぜ泳げる霞ヶ浦か

約100万人が流域に住む霞ヶ浦は、水質汚濁、ゴミ、外来魚、景観などの問題をかかえるが、基本問題点は、人と霞ヶ浦との関係が希薄になったことである。7年前の流域住民へのアンケートで、一年間で全く霞ヶ浦へ行ったことがない、ほとんどないと答えた人は、約80パーセントと、また霞ヶ浦を飲み水としていることを知っている人は約40パーセント程度であり、衝撃的な結果となった。これでは流域住民に対していくら浄化の必要性をピーアールしてもピンと来ない。少しでも流域住民の関心を高めよう、思いを結集させようということで、出てきたキーワード「泳げる霞ヶ浦」である。「泳げる霞ヶ浦」をきっかけにして、こうしたい、こうありたいという住民の前向きな気持ちを引き出そう、また泳いだことのある世代が責任を持ち、泳げるようにして次の世代に渡そうという意図がある。

100万人の泳げる霞ヶ浦市民フェスティバル

その具体的な取り組みとして行っているのが、協会の水辺交流プロジェクトを中心として、毎年、海の日（7月20日）に開催している「泳げる霞ヶ浦市民フェスティバル」である。

水上フラッグバトル、コンサート、観察会、釣り教室など、楽しい行事を通して、流域住民にまず霞ヶ浦を肌で感じてもらうのがねらいである。この参考となったのが、ヨーロッパの夏の三大イベントのひとつで、毎年、スウェーデンのストックホルムで開催されるウオーターフェスティバルである。湖の浄化を進めるために始めた学習交流会が発展して、楽しい行事が加わり、現在のウオーターフェスティバルになり、それが湖の浄化に役立ったという。

今年で第8回となる、泳げる霞ヶ浦市民フェスティバルも、千人ほどの行事から、今年は一万人の参加者にまでになった。また実行委員会にかかわる団体も、市民協会、土浦・つくば・牛久青年会議所を中心として、30団体がかかわり、協賛団体も200を数える。さらに沿岸市町村と連携し、夏休み期間、流域の各地で開催される行事をひとつのポスターにまとめる試みも行っている。

安全・安心な水・食の確保

住民にとって日常生活の中で、関心のあるのが、使った水をまた飲み水として利用する上で、飲み水の安全性は確保されているのかという点



である。また水と絡んでくるのが水産物、農産物である。食の安全性についてはこの一、二年、全国的に話題となった。霞ヶ浦でのコイヘルペスウイルス問題に関しては、水質との関連も問いただされた。このように安全・安心な水・食の確保は住民にとって継続的に取り組んでいくべき、大きな課題である。協会では人ひとプロジェクト中心に、この問題を取り上げ、研究者とともにセミナーを開催し、また湖岸に捨てられているゴミの回収を釣りの団体と連携して実施し、さらに漁業者との「食」の懇談会などを行っている。さらに地域経済プロジェクトと暮らしのプロジェクトが中心となり、霞ヶ浦の汚濁源となっている化学肥料や農薬を減らすため、「食べれば食べるほど霞ヶ浦がきれいになる」をキーワードに、有機野菜や減農薬野菜の普及を図る、消費者と生産者の連携組織づくりを模索している。

また茨城県や流域市町村、地域団体などと連携した浄化活動として、霞ヶ浦に注ぐ46河川を対象に、住民参加による河川ごとの水質調査を実施し、また主要河川を中心に探検隊を組織して、河川ごとの自主運営組織づくりを進めている。協会の身近な川プロジェクトはこの水質調査を技術的な支援すると共に、水源となる里山づくりにも取り組んでいる。



霞ヶ浦市民ミーティング

～今回は「霞ヶ浦市民協会」から
ご寄稿いただきました。～

まとめとして

以上、現在進行形の市民協会の取り組みを紹介したが、まちづくりという視点からこれまでの市民協会の取り組みについてコメントして、まとめとしたい。

- ・ 協会の活動には、住民や企業、行政、研究者、学校などいろいろな立場や職業、地域の人々が参加するが、これまで輪が広がってきたのは、皆に共通する生活者の視点で活動してきたことによる。
- ・ 活動を通して、共通の財産である霞ヶ浦があつてこそ、我々の日常生活や企業活動があるということ強く認識できたことはより会の結束を高めた。
- ・ 問題の客観的な認識を持つ上で、流域住民へのアンケートは有効であった。活動のテーマ、具体的なポイントを吟味する上で、また活動を広げていく上で、ニーズを把握することは有効である。
- ・ 誰もが分かりやすい目標イメージを伝える上で、「泳げる霞ヶ浦」というキーワードを示せたことは重要であった。
- ・ 中長期的な視野をもった行動計画ということで、泳げる霞ヶ浦市民2020計画、いわばみんなで作るシナリオづくりを行った。実施する体制づくりを意識して、いろいろな人に参加して進めたが、大変なエネルギーが必要であった。
- ・ 協会は率先役として、いろいろなモデル事業を行ってきたが、泳げる霞ヶ浦実現のためには、流域住民や企業、農漁業者、研究者、行政などの結束が不可欠であり、今後は協会のつなぎ役としての役割が、一層、求められる。泳げる霞ヶ浦を目指した活動に関心のある方は、是非、ご参加ください。

(霞ヶ浦市民協会 専務理事 伊藤春樹)

霞ヶ浦市民協会事務局

〒300-0033 土浦市川口 2-13-6

TEL 029(821)0552

FAX 029(821)6209

E-mail kcajimukyoku@dream.com

URL <http://www.kasumigaura.com>